



木 木

千葉県TEACCHプログラム研究会
2016年7月2日(土) 第84号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内

TEL:043-227-8557



「自閉症スペクトラム・発達障害の個性と特性をもって生きる

—長所を見つけて生かす保育・療育を—

ぶどうの木・川崎医療福祉大学 佐々木正美 氏

81歳になられた佐々木先生。今回が、千葉県TEACCHプログラム研究会での最後のご講演となりました。「毎年毎年勉強を継続してきた最後の講義。さみしいと言えばさみしいが、少しでも役に立てたら嬉しいです。」というご挨拶をいただき、最後の講義が始まりました。

自閉症スペクトラム・発達障害と言われる人の個性と特性を大切にしながら、この人たちに寄り添っていく、つまり「発達障害の世界を理解する」ことは、発達障害でない人と「どう違っているか」ということを理解するということであると、佐々木先生はおっしゃいました。「やや大げさに言うと、自分の周囲で起きていることの精神的な意味が、きちんと理解できていないということです。うっかりすると変人扱いされることがあります」とのこと。神経心理学的特性では、「時間の推移に伴う状況に見通しを立てることが、いろんな程度にできない」「自分の意志を伝えることができないというより下手」ということであり、そのため、自分からみんなの世界に入っていくことができないので、自分の殻に閉じこもっているように見えるとのことでした。宴会に参加することの好き嫌いなど、身近な例え話で分かりやすくご説明いただきました。

佐々木先生のお話から、自閉症スペクトラムの特性の内面にあることは、全てつながっているように思われました。「目で見たものを見たように記憶していく能力が高い」ので、「関心や興味が狭く、一度に強く深く向かう」そのため、「柔軟性がなく、同時にいろんなことを考えながら行動することは下手」なので、「予定にないことが起こるととても混乱する」。だから、スケジュールを作ることでこの人たちには活躍しやすくなるのだそうです。また、それを自分で作るようになると、「何事も自分のやり方で行動する」というふうに誤解されることがあるとのことでした。「相手の気持ちに合わせることも下手」で、マイペース・自分勝手と周りから思われたりすることがあるのだそうです。また、「暗黙の了解がなく」、いろいろな意味で「得意なことと不得手なことの落差が大きい」ことは、「自由に話すことができるようになっても、人の話を聞くことが下手」であることにもつながっていました。さらに、「理解できること・わかること・得意なことは、融通が利かないほど律儀」で、「字義どおりにやろうとする。」そのため、「優れているところを自分で社会に発揮していく世渡りは、いろんな程度に下手」なので、上手に導いてくれる人を必要としているのだそうです。そのような人に出会えると、うんと幸福で、いろんなことができるようになるとのことでした。よくできるところがいろんな程度に発揮できるように上手に育てることで、弱点・欠点はいろんな形で見えなくなっていくのだということでした。

このような神経心理学的特性をもった人たちである、自閉症スペクトラム・発達障害の当事者からの声として最も切実な訴えが、「熱心な無理解者にだけはならないでほしい」というものでした。この子たちに、辛いと思える経験はできるだけさせないあげたいということでした。「辛かった記憶が消えない」のですから、過保護で甘やかしているのとは全く違います。「自分のことをよく理解してくれる人に教育・支援してほしい」というメッセージの背景には、前述の神経心理学的特性があることが考えられます。最後に、「生まれてきてよかった!と思えるような日々を得られるように導いてあげたい。後押しをしてあげたい」という佐々木先生の思いをお話しいただきました。働くことを中心に「どこで働くか」と並行して、「どのように日々の余暇を楽しむか」という視点が、終局であるとのことでした。楽しいことを日々目指しながら、通勤につなげていくことを大事にしてあげたい。そして、子どもの方から、こちらの気持ちを受け容れるというふうになるためには、「どうしたらこの子の気持ちを尊重してやれるか」ということを頭に置き、こちらが先に、子どもの気持ちを大切にしてあげるということでした。「この子たちが、この子たちとしての能力が発揮されるように、この子たちで選択していき、それぞれの子に与えられた能力・資質の限り、上手に見守ってあげてほしい」という思いを語られて、先生は最後の講義を閉じられました。

佐々木正美先生のQ & Aコーナー

今回のQ & Aコーナーでは、保護者への伝え方と、ご本人への支援・教え方について話題になりました。特に、ご本人への支援や教え方については、「長所を見つけて生かす」という視点からコメントをいただきました。

Q1 保護者に、お子さんとの具体的なかかわり方をどのように伝えていけばよいですか？

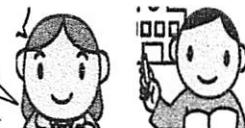


A1 「私にはこのように見えるお子さんです」という程度に伝えておくべきです。少しでも早くから、正しい理解で、自覚認識してあげれば、子どもに無理を強いませんし、子どもに対して適切な対応をしていくので、子どもはそれだけ伸びやかにいい発達をしていくわけです。

しかし、早く自覚認識したからその分だけ際立っていいということはありません。我が子の発達的な問題を早くから認識確認したい親なんていませんので、安心してしっかり自覚認識できるようになるまで待ちましょう。保護者が、正しく理解したうえで、子どもに無理を強いず、適切な対応をしていく、必ずそういう日が来ますから。言わいたら、その時からすぐに「ああそうか」と思えるものではありません。できるだけ穏やかに受け入れていくことができる環境を大切にしながら、心や気持ちが傷つかないように、大切に保護されながら、周りの人が伝えていくということだと思っています。

Q2 思うようにならないと、ひっくり返ったり、人に突進したりしている5歳児の女の子。

「やらない」と活動を拒否する生徒。どう対応したらよいか手立てを教えてください。



A2 無理な環境にいらっしゃるということが考えられます。子どもに過剰期待しているので、その子は、「どうしてわかってくれないの！」と欲求不満を強く表現しようとします。それだけ強い欲求不満の状態にあるわけなんです。何が、今、この子にこうさせているか、できるだけこういうふうにならないように…と、よほど、こちらが気を付けていても、無理な過剰期待を抱きがちになります。そうならないように極力注意してあげていただきたいと思います。

弱点・欠点・苦手なことをより早く直してやろうというような発想で育てるというのは、劣等感的な感情を強くしてしまい、とっても不幸なことです。得意なこと・好きなことをクラスの中でできるように、できることなら、みんなと一緒にできるように、まずはそこから始めることが大原則です。

発達障害の子どもというのは、発達にある種の凸凹があって、優れたところが必ずあります。その子のもって生れたいい面、能力の面を強調して、発揮できるようにする発想で生活なさってください。そういう視点を大切にしながら教育に当たってください。「よくできた！」「よくできる！」「前よりもこんなことができるようになった！」という点にこちらが気が付いてあげる。弱点・欠点の部分をとやかく言うのではなく、できることを周りが奨励して、保護して応援してくれていることでやつていいけるのです。できることが増えてくると、できることの陰に、弱点・欠点が隠れて、山のようにあるできないことが目立たなくなってくるのです。

Q3 イタズラを繰り返してしまう子。どのように教えていけばよいでしょうか？



A3 無理やりに先生の希望通りにさせようとする発想よりは、生徒の希望通りの活動を上手に与えてあげるところから始めて、だんだんにいい方向に発展してくるようにしていかれるのがいいと思います。まずは、その子が、今そのままの状態で乗ってくるような伝え方を考えあげることが大切です。

Q4 得意分野だと思って提供していた作業ですが、それができない時間の不安が大きくなっているような利用者さんがいるのですが…。



A4 「こだわり」「固執」「執着」というのは、不安が大きくなってしまいます。「楽しめること」「よくできること」「安心してできること」を中心に、そういう活動の範囲内でのバリエーションを作っていただくこと、変化を作っていかれること、これはいいことです。より楽しく、より生き生きと、できるように導いてあげてください。



TTAP講習会

6月5日（日）講師にNPO法人自閉症・サービス理事長の中山清司先生をお招きしてTTAP（TEACCHトランジッシュンアセスメントプロフィール）講習会が千葉のきぼーるで行われました。県内だけでなく県外からも福祉施設の職員や学校職員の方などご参加いただきました。



TTAPは、青年期・成人期の自閉症スペクトラムの人達が対象の検査法で、就労や社会生活に必要とされる様々な機能について、その能力や態度を測定するフォーマルなアセスメントです。自閉症スペクトラムの特性を活かすアセスメントとしては、とても有効であると言われています。

午前中、TTAPについての講義が行われ、午後には県内の中学校特別支援学級に在籍する生徒さんが検査者として協力してくださいました。実際にTTAPの検査を実施しました。

TTAPは、3つの尺度（直接観察尺度、家庭尺度、学校・作業所尺度）と6つの領域・12項目（職業スキル、職業行動、自立機能、余暇スキル、機能的コミュニケーション、対人行動）に構成されています。

2時間あまりの直接観察尺度の検査をグループごとにそれぞれの領域を担当し、交代で検査を実施しました。参加者からは、「TTAPの検査は何も知らなかったけれど実際に検査器具に触れ、各項目を練習後、協力者に検査を実践でき良い機会になった。でも一度では覚えられないので現場で実践を重ねたい。」と感想をいただきました。

その後、評価結果（合格、芽生え反応、不合格）を基にプロフィールを作成し、グループ毎に、適切な課題の設定を検討しました。課題設定には、「芽生え反応」の部分に注目し、本人の得意なことを活かした支援方法を考えることが重要であることも学びました。また、保護者には、検査結果を伝えると共に、本人の行動の特徴や今後の優先課題や指導・支援方法を示し、保護者や関係者が活用できるようなレポートを作成することが重要だと話されました。今回の協力者の特性（写真や絵などは、視覚的な指示の理解力があることから、正確に作業を行うために視覚的な指示書やリマインダーとして活用できるなど）をグループ毎に話し合い、家庭や学校、地域でできる目標を立てました。

協力者の保護者からは、「普段と違う様子を見ることができた。できると思っていたことができなかつたり、できないと思っていたことができたり、とても不思議な気持ちになった。今後、学校生活や家庭でできることを増やしていきたい」と感想をいただきました。今回のTTAPでは、直接観察尺度のみだったため、保護者の協力のもと家庭尺度、学校尺度を検査して、フォーマルアセスメントを完成させてインフォーマルアセスメント（日常生活での実践に基づく評価）へとつなげて行きたいと思います。皆さんも是非、実践して自閉症スペクトラムの方々が地域で幸せに暮らしていくようにしていきましょう。

<実際に参加者が協力者に検査を実施しているところ>

検査の方々は、緊張していましたがとても真剣に取り組み、良い雰囲気で進めていました。



新しいスタッフ紹介

江澤尚行さん（みずほ学園支援員）

今年度より千葉県 TEACCH プログラム研究会に運営委員として参加させていただることとなりました、みずほ学園支援員の江澤 尚行（えざわ なおゆき）です。よろしくお願いします。

お恥ずかしい話、自分は最近まで「TEACCH」という言葉を知らず支援に携わっており、数年前より当学園内で行われている中山清司様・岸川学様の研修の中で初めて TEACCH プログラムの存在を知りました。そして今回、同じくみずほ学園に勤める遠藤さんより運営委員としての参加のお声掛けをいただきての参加となりました。

第一回目のセミナーの際、初めての役員仕事で緊張していましたが、役員の方々みなさんがとても優しそうなので安心しました。また、とても連携のとれた対応で色々と準備が進んでいき驚きました。

今後、運営の仕事をしながらセミナーや周囲の方々から様々なものを吸収し利用者支援の向上、利用者ひとりひとりの理解に結び付けていくように勉強したいと思っています。会員や役員の皆様方に、ご迷惑をかけてしまうことがあるかもしれません、頑張っていきますので、ご指導よろしくお願いします。



平成28年度千葉県TEACCHプログラム研究会

第3回連続セミナーのご案内

期日 平成28年9月25日(日)13:30~16:30(13:00受付開始)

場所 きぼーる13階会議室1,2,3

内容 「 学齢期の支援 」

～教育現場での視覚支援の取り組み～ (仮題)

講師 菅谷恵子氏(船橋市立西海神小学校教諭)



編集後記

私の夏のテーマは「よく遊び、よく学び！！」です。この夏は資格取得のための勉強をしようと思っています。そして世界遺産白神山地の自然とふれあう旅を計画していたのですが・・・熊の出没の多さに戸惑っています。（断念か、勝負か（^-^））

毎年私は、新しい発見や体験を求めています。皆さん良い夏をお過ごしください。

吉村 奈津江